

英語語法文法学会

第27回大会資料

日 時： 2019年10月19日（土）

開催校： 北九州市立大学 北方キャンパス

住 所： 〒802-8577
福岡県北九州市小倉南区北方四丁目2番1号
<https://www.kitakyu-u.ac.jp/>

順路：

■ JR をご利用の方

鹿児島本線小倉駅下車、北九州モノレール小倉駅より約10分「競馬場前（北九州市立大学前）」下車徒歩約3分

■ バスをご利用の方

○福岡天神バスセンターより小倉行高速バス（なかたに号）で約70分、競馬場前北九州市立大学前下車徒歩約5分

○小倉・田川方面より西鉄バスで「北方・北九州市立大学前」で下車 徒歩約3分

英語語法文法学会

The Society of English Grammar and Usage

September 2019

英語語法文法学会 第27回大会プログラム

大会参加費：学会会員 1,000 円／当日会員 一般 2,500 円 学生 2,000 円（予稿集代を含む）

日 時：2019 年 10 月 19 日（土）

<当日は厚生会館の食堂（10.30-13.45）が利用できます。また近隣にコンビニエンスストア・飲食店がございます。>

開催校：北九州市立大学 北方キャンパス

住所：〒802-8577 福岡県北九州市小倉南区北方四丁目 2 番 1 号

<https://www.kitakyu-u.ac.jp/>

開催校委員：伊藤 晃、葛西宏信、永末康介

大会実行委員：住吉 誠（委員長）、大竹芳夫（副委員長）、滝沢直宏、出水孝典、
中澤和夫、西田光一、林龍次郎

- 司会者・関係者（ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者）控え室（本館 3 階 D-303 教室）
- 大会本部・運営委員会室（本館 3 階 D-304 教室）
- 一般休憩室（本館 3 階 D-302 教室）
- 書籍展示（本館 3 階廊下）

受付：10 時 00 分より 本館 1 階

ワークショップ（本館 3 階 C-302 教室） 10.30 – 11.50

司 会 前川貴史（龍谷大学）

1. 「Because 独立節—OED 編集長の著書に見られる実例を中心に—」
金子輝美（元・愛知淑徳大学非常勤）
2. 「as ... as (...) can be 再考」
松田佑治（立命館大学）
3. 「Regardless of whether の記述的考察」
大野真機（昭和大学）
4. 「but と置換可能とされる and についての一考察」
田岡育恵（大阪工業大学）

受付：12時30分より 本館1階

研究発表 13.00 – 14.45

第1室（本館3階 C-302 教室）

司会 松村瑞子（九州大学）

- 13.00 – 13.35 「先行事象（発話）に対する評価を表す There go 構文」
三野貴志（大阪大学大学院）
- 13.35 – 14.10 「Speaking of which の構文化分析再考」 山内 昇（大同大学）
- 14.10 – 14.45 「It is past time... の形式と意味」 桑名保智（旭川医科大学）

第2室（本館3階 C-303 教室）

司会 植田正暢（北九州市立大学）

- 13.00 – 13.35 「基数詞目的語によって生じる over-V の意味の考察」
岩宮 努（大阪大学大学院）
- 13.35 – 14.10 「「上位語型」同族目的語構文の動機づけ—名詞 *laugh* が生起するパターンを中心に—」
大井良友（大阪大学大学院）
- 14.10 – 14.45 「be starting/beginning + Ving における-ing 形の二重使用制約について」
島本慎一郎（日本大学）

総会（本館3階 C-301 教室）15.00 – 15.20

総合司会		西田光一（山口県立大学）
開会の辞	会長	大室剛志（名古屋大学）
開催校代表挨拶		葛西宏信（北九州市立大学基盤教育センター語学 教育担当副センター長）
学会賞選考報告	会長	大室剛志（名古屋大学）
事務局報告	事務局長	吉田幸治（近畿大学）
会計報告	会計	吉川裕介（近畿大学）

シンポジウム（本館3階 C-301 教室）15.35 – 17.45

テーマ「否定と尺度と談話と—否定表現とその周辺—」

司会 五十嵐海理（龍谷大学）

- 「日本語と英語における否定極性項目と緩叙法」 有光奈美（東洋大学）
- 「否定の繰り返しと Not-topic」 五十嵐海理（龍谷大学）
- 「否定辞 not を含む等位構造を巡って」 関 茂樹（大阪市立大学）

討論者 佐野まさき（立命館大学）

閉会の辞 伊藤 晃（北九州市立大学）

懇親会 厚生会館1階生協食堂

18.00 – 19.30

（懇親会費：一般 5,000 円 学生 3,000 円）

ワークショップ（本館 3 階 C-302 教室） 10.30 – 11.50

司会 前川貴史（龍谷大学）

Because 独立節—OED 編集長の著書に見られる実例を中心に—

金子輝美（元・愛知淑徳大学非常勤）

Pinker は文体感覚を論じた近著 *The Sense of Style* (2014: 204) で、Because 独立節の使用を戒めている。だが、同じ著書 (p. 205) で、Because 独立節の実例を挙げて、「一連の相互に関連する主張が、単一の理由に要約されて、because 独立節で表現されることは必然的に可能である」と述べている。模式化すると、 $X_1, X_2, \text{Because } Y$ となり、 Y は先行する X_1 と X_2 との因果関係を述べている。 X_1 と X_2 は相互に関連する主張であると認識されている。OED 元編集長 J. Simpson の近著 *The Word Detective* (2016) には、3 例の Because 独立節が見られるので、それらが表す因果関係を文脈の中で探ってみる。3 例では、 $X_1 \text{ and } X_2, / X_1, X_2, / X_1; X_2,$ がそれぞれ Because 節に先行する。だが、because 節が示す因果関係は、 X_2 だけを対象にするのか、 X_1, X_2 全体を受けているのかは明確に判断できない。また X_1 と X_2 がどの程度まで意味的に関連性をもつのかも不明確であるように感じられる。この言語事象に言及した文献は少ない。「書きことば」で稀であることは、経験的に実感されるが、実例は皆無ではない。今後の課題は、一定の基準に基づいて調査対象を広げ、使用実態を客観的に把握し、母語話者の感覚も参照して、現在どの程度まで生産的であるのかを明らかにすることである。

as ... as (...) can be 再考

松田佑治（立命館大学）

本発表は、as ... as (...) can be (この上なく ... だ) の先行研究である Jespersen (1927: 178-179)、Curme (1931: 301)、市河 (1954: 127-132)、大沼 (1968: 147-148)、八木 (1995)、岡田 (2014) を発展させたものである。

まず、as ... as (...) can be の 4 つの Type の解釈を確認する。

- | | |
|---|----------|
| (1) a. John is as happy as can be. | [Type A] |
| b. John is as happy as he can be. | [Type B] |
| c. John is as happy as ?the/a/one human can be. | [Type C] |
| d. John is as happy as *happiness/happy can be. | [Type D] |

(1c) は以下のように言い換えることもできる。

- (2) As a human, John is extremely happy.

次に、八木 (1995: 47) が指摘する as ADJ as can be p.p. を検討する。

- (3) The acting, though it may broaden some of the rapier-thin parts, is as good as can be demanded.—OED2, s.v. PAPIER-THIN(1961)

本発表では、比較削除の観点から、(3) は「この上なく ... だ」の意味ではないこと

を主張し、as ADJ as can be と as ADJ as can be p.p. を区別すべきと提案する。なお、時間の制約上、as -ly 副詞 as can be は取り上げない。

Regardless of whether の記述的考察

大野真機（昭和大学）

従来、regardless of に続く補文は whether 節のみが可能であって、if 節は不可とされてきた。その説明として、例えば Nakajima (1996) および中島 (2016) では、whether 節と if 節の分布の違いを、「補文のタイプ (Complementizer Phrase か Topic Phrase か)」と「補文が占める構造的な位置」の違いに求められている。Whether 節は that 節と分布がパラレルなことから CP を成すと仮定されている。そして CP は補部の位置を占める性質を持つことから、whether 節は regardless of に後続する補文として出現できると主張する。If 節は ϕ -that 節と分布がパラレルなことから、CP よりも小さなまとまりである TopP であると仮定されている。TopP は補部の位置には現れないことから、if 節が regardless of の補文にはならないことが説明される。しかし実際には、標準的とはいえないまでも、無視できない程度で、規範的な regardless of whether とは異なる形式が（例えば **Regardless if that story was true or not, my point was to break a reality to them.** (*The Speed of Life*, Nick Linde, 2006:90) など) 確認される。本発表では、中島分析が予測する（あるいは排除しない）可能な「regardless (of)+補文」の形式がどの程度の使用実態を伴っているのかを記述的に考察する。

but と置換可能とされる and についての一考察

田岡育恵（大阪工業大学）

辞書の and の項目に and は「but と交換可能」と記述されていることがある。しかし、一見、and と but で交換可能と思われる場合でも but ではなく and が用いられているのにはそれなりの理由があるのではないか。

(1) He looked vicious and attractive. (A. Christie, *The Labours of Hercules*)

(1) の前項「やくざな感じである」から「やくざみたいなら魅力的ではない」が想定のひとつとして考えられる。そこに、その想定に反する「魅力的」という表現が後項に来る。このような文脈で but は前項の含意を否認するシグナルになるので適切である。しかし、他方、(1) には「やくざな感じが 素敵だ」という状況も考えられる。その場合、前項が後項の要因になるので and でなければならないだろう。but の場合、聞き手は前項の持つ何らかの想定が後項で否認されると身構えるが、and の場合は前項と後項の譲歩の解釈は聞き手に委ねられる。and が示すのは前項と後項の共存であるが、その共存されるものに何らかの対立が見い出されるのなら、聞き手がそれを予想していない分、意外性、驚きが生じることになる。発表では、一見、but と置換してもよいのではないかと思われる例について and を用いる場合と but を用いる場合の違いについて述べたい。

研究発表 13.00 - 14.45

第1室 (本館3階 C-302 教室)

司会 松村瑞子 (九州大学)

先行事象（発話）に対する評価を表す There go 構文

三野貴志 (大阪大学大学院)

本研究では、(1) のように先行事象もしくは先行発話を受けて、その出来事や行為者に対する憤慨や否定的な評価を表す直示の there go 構文の振舞いを実証的に考察する。

(1) “I think it might be... blood.” Amanda followed the spots to a set of stairs. Leah shook her head. “There goes your overactive imagination again.” (COCA)

there go 構文は、先行研究で扱われている (2) のように主語に固有名詞や代名詞だけでなく、(1) の your overactive imagination のような行為を表す名詞や (3) の the spokesperson のように先行発話から想起される象徴的な人物など多様な名詞が生起する。there go 構文は、対象の事象にとって象徴的な要素（人・行為・発言）の出現を表し、例えば、(1) は「またでたよ、お前の過度の想像力が。」という風に訳される。つまり、there go 構文は事象（発話）において象徴的な要素（人・行為・発言）を「とりたて、前面に押し出す」ことで、その対象となる事象（発話）に対する評価を表している。

(2) a. There goes Harry again, making a fool of himself. (Lakoff 1987: 483)

b. There you go again — jumping to conclusions. (*Oxford Advanced Learner's Dictionary*)

(3) A: I just I want everyone to know how much this award means to me. I really love this business, so thank you for being like my new family.

B: There goes the spokesperson for the entire industry. (*Movie Corpus*)

Speaking of which の構文化分析再考

山内 昇 (大同大学)

本研究では、(1) に示すような、話題転換の際に使用される speaking of which という表現について考察する。

(1) We've been invited to Rachel and Jamie's wedding — speaking of which, did you know that they're moving to Ealing?

(*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, 4th Edition)

一部の先行研究では、speaking of which が話題転換を合図するチャンクとして「構文化」(Traugott and Trousdale 2013) を遂げているという分析が提案されている。本研究では、speaking of which の構文化分析を再考し、提示された証拠のみから、同表現に構文化が起きたとは断定できないことを示す。代案として、speaking of which は、話題転換の際に使用される speaking of X における of の目的語位置に「文外に先行詞

をもつ関係代名詞 Which」(Which と略記)が生起した事例であり、構文化分析の証拠として提示された speaking of which に観察される特異性は、speaking of X と Which が有する個別の特異性に還元可能であると主張する。

It is past time … の形式と意味

桑名保智 (旭川医科大学)

「…すべき時である」を意味する表現として、(1) のような It is time 構文がよく知られている。

(1) It's time for me to leave. = It's (high) time (that) I was leaving.

この構文に関する先行研究は非常に多いものの、time の直前に past が生起する (2) のような構文はほとんど注目されていない。

(2) I believe it is past time for me to take charge of my life.

本発表では it is past time ... の文を便宜上 PAST 構文と呼び、その形式と意味について記述することを目的とする。電子コーパスやインフォーマント調査から得られたデータを観察し、PAST 構文はその補文として to 不定詞だけではなく that 節も後続可能であること、that 節内の動詞は仮定法現在・仮定法過去が現れる傾向があること、及び high や about が生起する It is time 構文よりも意味的に強い表現であることを述べる。また、PAST 構文の補文の選択と意味との関係について考察する。

第2室 (本館3階 C-303 教室)

司会 植田正暢 (北九州市立大学)

基数詞目的語によって生じる *over-V* の意味の考察

岩宮 努 (大阪大学大学院)

(1a) にみられるような *over-V* が具体的な金額を目的語とする際に生じる新規的な意味、また *over-V* の自動詞化に伴ってあらわれる「*by*+基数詞」の比較表現(1b, c 参照) という2つの言語現象について検討する。

(1) a. We **overspent \$400,000** last year and ... (Canada 2018/ Now Corpus)

b. ... he had been paying his points number, not the amount owing, and had **overpaid (by) thousands and thousands of dollars**. (Wordbanks)

c. If I **oversleep by even five minutes** I feel like I'm playing catch-up for the rest of the day. (GB 2017/ Now Corpus)

over-V に前置詞 *by* 及び基数詞が伴うことで生じる比較表現は生産性が高く、上記の *spend, pay, sleep* に加え、*stay, work, price, charge* など様々な基体動詞で生じるが、比較的生起頻度の高い動詞、たとえば (1a) の *overspend* の基数詞目的語の前に *by* を挿入、あるいは (1b) の *overpay* に続く *by* を省略しても容認される。本研究は *over-V* という形になることで生じるこの特殊な比較表現を、構文 [NP₁ *over-V*_i (NP₂) (*by*) Numeral P_j] ↔ [X₁ SEM_i the amount; more than Y (to Z₂)] (Y: a contextually-determined standard/ Z: a goal object) という観点から考察する。

「上位語型」同族目的語構文の動機づけ

—名詞 *laugh* が生起するパターンを中心に—

大井良友 (大阪大学大学院)

「同族目的語構文」に関する先行研究の中には、*She laughed a hearty laugh.* のような典型的事例だけでなく、(1) や (2) のように動詞に後続する名詞が動詞と形態的に異なる下位語や上位語にあたる語であるパターンも同族目的語構文の事例として扱っているものがある (高見・久野 (2002) など)。

(1) Chris laughed an insane giggle. (COCA) [下位語型]

(2) She giggles a nervous laugh. Ha ha ha. (同上) [上位語型]

本発表は、同族目的語構文の典型的事例や「下位語型」と比べて使用頻度が少なく (大室 (2000))、ほとんど議論がなされてこなかった「上位語型」を考察対象とする。同族目的語には形容詞などの修飾表現が必須であるといわれているが、コーパス等での調査から、(3) のように動詞に後続する名詞句内に修飾表現が伴わない上位語型の用例が複数見つかった。

(3) From the end of the table, Marshall cackles a laugh. (COCA)

本発表では、(3) のような上位語型の特異性を指摘した上で、当該パターンが同族目的語構文だけでなく、*John barked a laugh.* のように、動詞が目的語の表す行為の様態

を詳述する機能を果たしている、同族目的語構文とは独立した別の構文によっても動機づけられていると主張する。

be starting/beginning + Vingにおける-ing形の二重使用制約について

島本慎一郎（日本大学）

本発表では、-ing の連続による形態的な“ぎこちなさ”の観点から論じられてきた「二重-ing 制約」について再検討する。-ing の二重使用が形態的な理由だけで排除されるのであれば、いかなる動詞にも幅広く制約が課されそうなものである。しかしながら、Huddleston & Pullum (2002: 1243f.) が指摘するように、実際には、使用される動詞の種類によって容認度に差がある。「二重-ing 制約」が課されるのは、主に、アスペクト動詞が進行形で用いられる場合であるという。アスペクト動詞とその他の動詞の間で二重-ing の容認度に差がある理由についてはこれまで意味の観点からは説明されてこなかった。

(1) a. *They are *starting quarrelling*.

b. We are *considering buying* one.

二重-ing が容認されない理由を単に形だけに求めるのではなく、進行形とそれに後続する Ving が表わす意味にも要因があること指摘する。すなわち、起動を表わすアスペクト動詞の進行形が表わす「継続性」と後続する Ving の表す「遡及性」が意味衝突を起こし、「時間の逆行」現象を生じさせることが、二重-ing の使用が避けられる意味的要因であると主張する。

シンポジウム（本館3階 C-301 教室）15.35 – 17.45

テーマ 「否定と尺度と談話と—否定表現とその周辺—」

司会 五十嵐海理（龍谷大学）

英語に限らず、否定は、統語論、意味論・語用論、統語と意味のインターフェイスの各分野で研究がなされるなど、多面的な現象であり、Klima (1964) 以来、様々な研究がなされてきた。

本シンポジウムでは、こうした従来の否定研究とは一線を画し、伝統的な否定のトピックである否定極性項目と緩叙法をレトリックの観点から捉え直す研究（有光）で尺度の観点から否定を捉え、また、これまであまり研究のなかった代用表現としての *not* に関する研究（関）や *Not* の話題化と呼ばれる現象についての考察（五十嵐）を通して談話から否定を捉えることで、否定についての異なった見方を提供することを目的とする。

また、日本語における否定や焦点化詞について研究されてきた佐野まさき氏にも指定討論者としてご登壇いただき、統語論・意味論的な立場からご議論いただく。

日本語と英語における否定極性項目と緩叙法

有光奈美（東洋大学）

本発表では、従来、単なる記号操作と考えられがちであった否定について、レトリックの側面を取り上げ、語用論的・認知言語学的な視点から分析する。

第一に、否定極性項目 (Negative Polarity Items) に関わる問題を扱う。減度詞 (*minimizer*) は否定を強めるため否定の作用域に生じる。否定極性的減度詞について、Horn (2001, 邦訳 2018) が述べている 4 分類などの先行研究を踏まえながら、本発表では *an inch* に類する日英語の表現を取り上げる。

(1) *You never moved. Not an inch.* (COCA)

(2) “*Not an inch worth,*” I said. (COCA)

(3) 一ミリも思わない。

特に (2) や (3) の拡張的用例を指摘し、字義通りには距離に関わるはずの否定の強調が、距離に限定されず量的に用いられる背景を探る。

第二に、緩叙法における否定のメカニズムを論じる。*Not bad./ Not bad at all.* の解釈が「悪くない」になるか「(非常に) 良い」になるかはイントネーションや表情が影響する。また、*Not bad./ Not bad at all.* に対応する *Not good./ Not good at all.* を比較すると、非対称的な関係が存在している。関連する具体事例を挙げながら日英語で比較し、共通点と相違点を考察する。

否定の繰り返しと Not-topic

五十嵐海理（龍谷大学）

英語の否定はフランス語の *ne...pas* などとは異なり 1 つの否定辞 *not* で表現されるのが通例である。しかし、本発表では、(1) のような 2 つの *not* が同一文内に生起し、かつ否定としては 1 つであるような例について考察する。

(1) *Not with my wife, you don't.* (Horn and Wansing 2015)

このような現象については Culicover (1999) が *Not-topic* という名前を付けて詳細に観察しているが、そこでは、(1) ならば前置詞句が話題化して文頭に移動しているとする分析を提示しながら、文頭の *Not* が説明できず、形式のみが提示され、それが母語話者のこの構文に対する知識の総体であるとされる。また、天沼 (2012) も話題化による移動を前提としている。これに対して関 (2013) では、文頭の *Not* を節の代用形（付言タイプ）とし、前置詞句の内容を条件とした場合には、否定文が成り立つという解釈になると分析している。本発表ではこれを冗語的否定 (Horn 2010) の一種と考え、実例を踏まえながら、2 つの否定辞で 1 つの否定を表わす仕組みを検討する。

否定辞 not を含む等位構造を巡って

関 茂樹（大阪市立大学）

(1)、(2) の下線部で示されるような照応詞を含む等位節は、とくに問題なく生じることができる。一方、否定辞 *not* を含む等位節も許容される (cf. (3), (4))。

(1) He could hear the baler, that and the sound of the bees. Otherwise
all was still. (R. Rendell, *To Fear a Painted Devil*)

(2) He looked slightly amused, either that or the lamp flame flickered.
(M.G. Eberhart, *The Bayou Road*)

(3) A: Did the police find some medicine on the table?

B: No, not that and not any drinks there, either.

(4) A: We don't have much funding for the project.

B: No, not that and not creative skill, either.

neither ~ nor ... の場合も同様であり、等位接続が可能である。

(5) A: Have you found her address?

B: No, neither that nor her mobile phone number.

本発表では、否定辞 *not* を含む等位節、とりわけ従来注目されることのなかった定型の等位節の諸特性について考察したいと思う。

英語語法文法学会役員

名誉顧問	八木克正	安井 泉	内田聖二	
会長	大室剛志			
事務局長	吉田幸治			
会計	吉川裕介			
会計監査委員	住吉 誠			
運営委員	五十嵐海理	牛江一裕	梅咲敦子	大竹芳夫
	大室剛志	金澤俊吾	吉良文孝	住吉 誠
	滝沢直宏	出水孝典	中澤和夫	西田光一
	林龍次郎	前川貴史	吉田幸治	
編集委員	吉良文孝（編集委員長）			
	牛江一裕	大竹芳夫	大橋 浩	大室剛志
	金澤俊吾	澤田茂保	滝沢直宏	中澤和夫
	中山 仁	西田光一	林龍次郎	松村瑞子
	家口美智子	山岡 洋	吉田幸治	

発行日 2019年9月5日

編集・発行 英語語法文法学会
代表者 大室剛志
事務局 〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1
近畿大学経営学部 吉田幸治研究室内
Tel.: 06-4307-3365 (研究室)
Fax: 06-6729-2493 (経営学部 教養・基礎育部門)
Email: segu.office@gmail.com
URL: <http://segu.sakura.ne.jp>
振替口座 02260-0-70393 英語語法文法学会
© 英語語法文法学会

北九州市立大学 北方キャンパスへのアクセス



<https://www.kitakyu-u.ac.jp/>

■JR をご利用の方

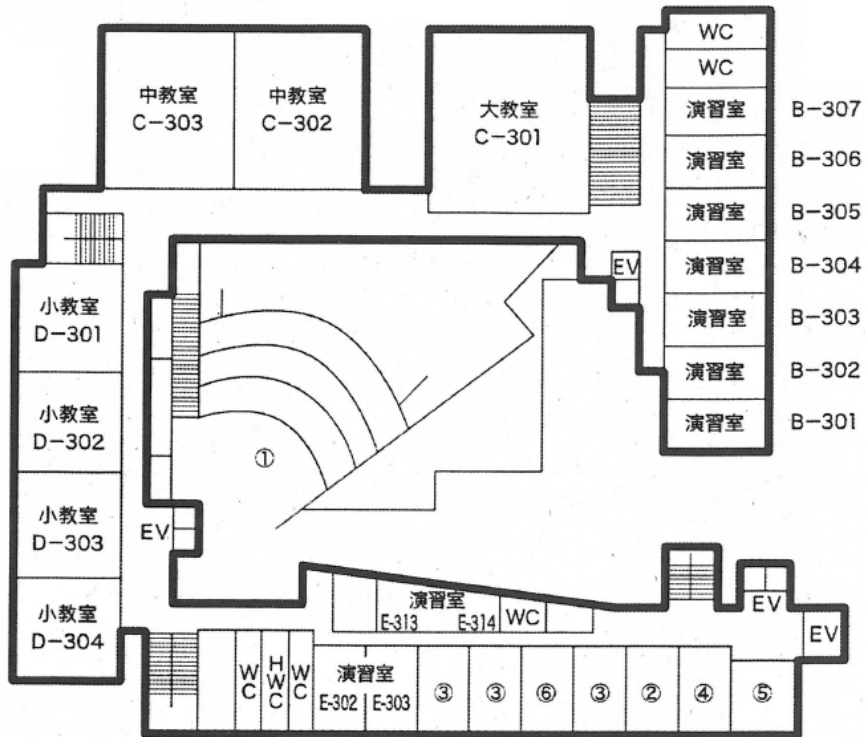
鹿兒島本線小倉駅下車、北九州モノレール小倉駅より約 10 分「競馬場前（北九州市立大学前）」下車徒歩約 3 分

■バスをご利用の方

○福岡天神バスセンターより小倉行高速バス（なかたに号）で約 70 分、競馬場前北九州市立大学前下車徒歩約 5 分

○小倉・田川方面より西鉄バスで「北方・北九州市立大学前」で下車 徒歩約 3 分

本館教室配置図



- ワークショップ (本館3階 C-302 教室)
- 研究発表 第1室 (本館3階 C-302 教室) 第2室 (本館3階 C-303 教室)
- 総会およびシンポジウム (本館3階 C-301 教室)
- 司会者・関係者 (ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者) 控え室 (本館3階 D-303 教室)
- 大会本部・運営委員会室 (本館3階 D-304 教室)
- 一般休憩室 (本館3階 D-302 教室)
- 書籍展示 (本館3階廊下)